べっぷの文化財

No.52
令和４年３月

－別府市立図書館100年－

別府市教育委員会
別府市文化財保護審議会

目　次

はじめに（檜垣伸晶）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・1

1　図書館の歴史－図書館百年の星霜と変遷－（檜垣伸晶）・・・・・・・・・・1

2　郷土資料収集へのこだわり（檜垣伸晶）・・・・・・・・・・・・・・・・・・4

3　郷土資料紹介の目的（檜垣伸晶）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・5

（1）別府市指定有形文化財「別府・浜脇・田の口古地図」（事務局）・・5

（2）古文書（事務局）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・8

（3）歴史資料（事務局）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・9

（4）行政関係資料（事務局）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・10

（5）教育関係資料（事務局）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・10

（6）郷土史研究関係資料（事務局）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・11

（7）古地図（事務局）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・12

（8）絵葉書（外山健一）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・14

（9）別府市公会堂建設関係資料（事務局）・・・・・・・・・・・・・・・17

（10）油屋熊八関係資料（事務局）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・17

（11）別府温泉近代発展史資料（外山健一・事務局）・・・・・・・・・・18

おわりに（檜垣伸晶）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・20

執筆者

檜垣伸晶（別府市立図書館長）

外山健一（別府市文化財保護審議会委員・近代史）

事務局：社会教育課職員

はじめに

私たちの誰もが、自分の生まれたまち、育ったまち、今住むまちについて知りたいと思うことはとても純真な気持ちからである。「別府を知りたい」という欲求は「郷土を知る」ことにほかならない。この別府の歴史を学ぶことが「郷土愛」の醸成につながる第一歩のはずである。やがてそれは「希望」という自分自身の将来や別府の未来へ向かう純粋な行為へと舵を取るだろう。それを支援出来るのが別府市立図書館にある貴重な資料の数々である。

当館の大きな使命の一つに別府の歴史を記録、保存・継承し、活用していくということがある。この歴史を記録した郷土資料（「地域資料」とも言われる。）は、古文書、公文書、絵図等の資料、あるいは温泉に関する資料等で、令和３年度末にはおよそ３万点に達する見込みである。まさに歴史の宝庫と呼ぶにふさわしい。言葉を換えれば、当館は蔵書という大きな文化遺産を所有していることになる。

歴史を記録し、保存・継承していくとは、郷土の文化遺産という宝に磨きをかけて、さらなる本質的な価値へと高めていく「不易（ふえき）」であり、活用とは、歴史を学び新しい発想で価値を創造していく「流行」であるに違いない。「不易流行（ふえきりゅうこう）」の理念のもと、この文化遺産をいかに記録、保存・継承し、活用していくかが、私たちに与えられた課題である。

大正 11 年（1922）６月に別府北尋常高等小学校（べっぷきたじんじょうこうとうしょうがっこう）に併設された当館は、幾多の変遷をたどり本年で 100 周年の輝かしい節目を迎える。市民待望の新しい図書館整備計画が進む中で、これまでの 100 年を継承し、新しい 100 年を創造していく当館が『べっぷの文化財』シリーズの№.52 を担う大きな意義がここにあると確信している。

１　図書館の歴史――図書館百年の星霜と変遷――

（草創期）

当館は別府町時代の大正 11 年（1922）６月１日に別府北尋常高等小学校（現在の別府市立別府中央小学校）に開設（５月 31 日認可）される。初代館長は第 19 代小学校長の河野完吾が兼務し、同年６月 10 日に蔵書数 1,000 冊で開館した。

大正 12 年（1923）元旦に発行された『町勢の一班』（別府町長・佐藤綱五郎）に「図書館の開設」について、「北小學校ニ附設セル本町図書館ハ五月三十一日認可開設シ篤志家ノ寄贈図書及ビ寄附金ヲ以テ漸次内容充實シツツアリ開設ヨリ十一月末日迄ノ開設日數百六十二日入場人員二〇一五人ナリ」と記している。この年度の最終的な閲覧人員は５千人に過ぎなかった。

図書館が設置された別府北尋常高等小学校

また、大正 12 年（1923）第７回町

会議題１号「大正 11 年度大分県速見郡別府町歳入出決算書（決算書綴・別府町役場）の図書館費は、決算額 11,998 円（予算 12,000 円）となっており、現在の企業物価指数等で換算すると 1,000 万円前後の予算・決算額であったと推測される。

別府市制が施行されたのはその２年後の大正 13 年（1924）４月であるが、昭和８年（1933）３月までの 12 年にわたり別府北尋常高等小学校から別府市立北尋常高等小学校へとその歴史を刻んだ。

（公会堂の時代）

昭和８年（1933）４月に当館は第２期の時代を迎える。昭和３年（1928）に建築された別府市公会堂の地階に移転し新たなスタートとなる。

昭和９年（1934）に発行された別府市勢要覧によると蔵書数 2,009 冊、閲覧人員は 5,580 人、閲覧書籍数は 9,494 冊とある。

兼子鎮雄

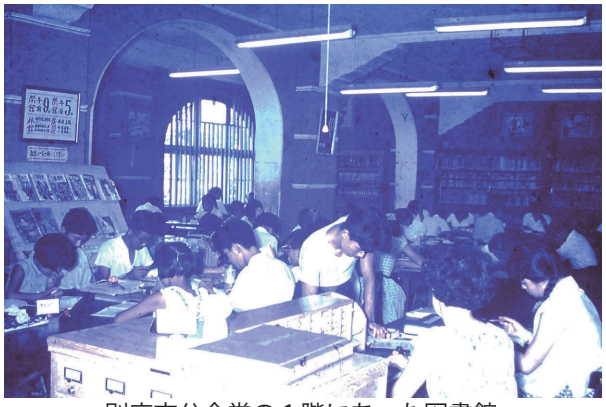
開館以来、市立図書館としてようやく体制が整ったのは、昭和 17 年（1942）５月に別府中学校の初代校長（昭和９年（1934）３月～昭和 17 年（1942）３月）を務め、「至誠（しせい）の人」と慕われた兼子鎮雄（かねこしずお）が初の専任館長（昭和 17 年（1942）～昭和 27 年（1952）３月）となるに及んで蔵書も増し、館外活動も盛んになった。

昭和 25 年（1950）に「図書館法」が制定され、公立図書館として運営費の国庫補助を受けるに至り蔵書の確保が図られた。

また同年に市公会堂は市民会館・中央公民館に転用されたのである。

昭和 28 年（1953）７月に待望の書庫が竣工（鉄筋コンクリート２階建て）し、蔵書数も 16,357 冊となる。

「別府図書館」の看板がかかる公民館


別府市公会堂の１階にあった図書館

（図書館と美術館）

昭和 25 年（1950）10 月に佐藤慶太郎の寄付金を基金として、公会堂３階に九州初の本格的な公立美術館である別府市美術館が誕生した。これにより図書館と美術館は、同じ公会堂（市民会館）の中に共存することとなる。

昭和 36 年（1961）９月 10 日、中央公民館に隣接する同一敷地内に郷土研究室と美術館を併設

昭和 36 年に新築された別府市立図書館

したクリーム色のモダンな図書館が新築され、移転開館した。

昭和 52 年（1977）10 月 8 日には旧大分県物産館を改装し、図書館の分館的役割を担う「別府ふるさと館」が開館。泉都別府を象徴する温泉資料、散逸してゆく考古・民俗資料等を収集保全展示し、本市の文化の足取りをたどり、向後の文化の発展に資することになった。

そして昭和 59 年（1984）5 月 10 日に別府市美術館は、旧ふるさと館資料を展示する民俗資料館、マンガ展示室などを併設する施設として上人ヶ浜町の地に移転開館し、生まれ変わった。

同時に、当館は初めての単独施設として歴史をあゆむことになる。

（現在地での図書館）

昭和 62 年（1987）7 月 10 日には、現在地である千代町の別府南部振興開発ビルに移転開館した。旧図書館の約 2.5 倍の広さを持ち、読み聞かせや芝居が出来る母子室を備え、市民が気軽に利用できる明るいロビーを新設し、図書サービスを展開してきた。

昭和 62 年に開館した現在の図書館

図書館活動の様子

２　郷土資料収集へのこだわり

（郷土の歴史を記録する資料）

郷土資料の蔵書の記録を調べると、昭和29年（1954）発行の図書館要覧には一切その記載がなく、昭和34年（1959）の図書館要覧にようやく、その実態を見ることが出来る。

資料説明では、蔵書数20,136冊。そのうち郷土資料はわずかに135冊でしかない。一方、郷土室資料の説明では、古文書や巻物等の文書は1,000枚、仮綴、パンフレットの類は400冊、洋書、和書等の体裁を整えたものは250冊、帖簿の類は500冊、図録1,000枚、出土品や標本は600点等とあり、すでに相当数の郷土資料的な収集がなされていた。

継続的な郷土資料の収集は昭和36年（1961）に新築され併設された郷土研究室に「文学と別府」資料、別府郷土資料、民俗民芸資料、古代文化資料、温泉資料として受け継がれた。

以後、昭和44年（1969）７月に「教科書による教育100年展」、昭和45年（1970）５月に教育委員会と別府市文化財保護委員会（委員長：池田三比古）の共催による「郷土切支丹関係資料展」、昭和46年（1971）２月に「別府温泉資料展」などを精力的に開催した。

こうした中、当館所蔵の郷土資料目録第１集が昭和52年（1977）４月に発行され、本格的な書名検索が可能となった。続いて昭和54年（1979）６月に「第２集」を、昭和57年（1982）１月に「第３集」を発行し、昭和61年（1986）２月に郷土資料目録の全容が整った。

平成19年（2007）４月には図書館情報システムの稼働により郷土資料の検索が可能となり、閲覧に供されている。

（多くの貴重な古文書）

当館には、多くの収納和本等書目を所蔵している。末松文庫（すえまつぶんこ）、別府市公会堂建築関係資料、公文書、堀文書（ほりもんじょ）、浜村文書（はまむらもんじょ）、後藤庄屋文書（ごとうしょうやもんじょ）、日名子文書（ひなごもんじょ）、雑日名子文書（ざつひなごもんじょ）、日名子家旧蔵（ひなごけきゅうぞう）、野田村庄屋文書（のだしょうやもんじょ）等の古文書等を館内専用の端末で閲覧に供している。

（教育関係資料）

学校資料を中心とする教育関係資料は、別府大学、別府溝部学園短期大学、立命館アジア太平洋大学はもとより、県内大学や別府ゆかりの立命館大学、京都大学、九州大学等の論文、研究紀要を所蔵している。また、市内の小中学校、高等学校の研究紀要、あゆみ、要覧、記念史も大切な学校資料であり、市民や郷土をはなれた出身者たちからのレファレンスに応え得る資料となっている。

県立図書館等の先哲叢書、県立歴史博物館の紀要、県内の文化財発掘調査報告書などの豊富な資料を所蔵している。

（別府ならではの資料）

郷土資料の中でも「別府ならでは」の代表の一つが温泉関係資料である。

明治42年（1909）に佐藤蔵太郎が著した「別府温泉誌」は112年前の別府温泉の文化が窺える貴重書である。また、昭和３年（1928）に高浜虚子が著した日本八景紀行「別府温泉」は大阪

商船の紅丸で別府に入港し、亀の井旅館に止宿、郷土研究家である初代別府町長の日名子太郎が地獄めぐりを案内する。

その他、「日本温泉案内」（大正９年、大正 14 年、昭和６年発行）、大正 12 年（1923）の鐵道省発行の「鐵道旅行案内」などの歴史を刻む本を所蔵している。

古文書保管の様子

デジタル化した古文書の閲覧用パソコン

３　郷土資料紹介の目的

郷土資料は別府市を中心にした地域の歴史、地理、文化、行政、経済、自然など各分野の出版物や別府市や周辺自治体の刊行物である。また郷土関係者による著作や文化財的資料、博物館的な資料、さらには古地図や写真・絵葉書等、その領域は極めて広がっている。

本稿で紹介する古地図は、明治から大正、昭和にかけたものであり、時代を追って町名や生活文化の変遷を知ることが出来る。

絵葉書は別府の歴史の証言者であり、日名子文書（ひなごもんじょ）は幕末の頃の別府地方の経済界で活躍した日名子家のもので、別府地方における社会の動向、経済界の動き、観光開発の基盤等の解明には欠くことの出来ない貴重な史料である。

初代別府市長の神澤又市郎（かんざわまたいちろう）が「泉都別府に公会堂なきは、一大欠点とする所なり」との強い思いで昭和３年（1928）に竣工した別府市公会堂は市民会館・別府市中央公民館の施設名を経て、リニューアルにより再び公会堂として蘇った。この別府市公会堂の建設関係資料を保管している。

その公会堂で、昭和６年（1931）10 月に全国大掌大会を開催した、別府観光の先覚者・油屋熊八（あぶらやくまはち）に関する資料も保管している。また、別府温泉資料は「別府ならではの資料」で先述したとおり、別府国際観光温泉文化都市の歴史資料である。

（１）別府市指定有形文化財「別府・浜脇・田の口古地図」

別府市指定有形文化財の「別府（べっぷ）・浜脇（はまわき）・田（た）の口（くち）古（こ）地図（ちず）」は、延享（えんきょう）５年（1748）に制作された地図で、別府・浜脇・田の口、朝見（あさみ）の各村の様子が描かれている。このうち、浜脇・田野口村の部には「延享５年２月」と記され、庄屋（しょうや）・組頭（くみがしら）の連署（れんしょ）がある。

各絵図とも美濃紙（みのがみ）を継ぎ合わせた大判の耕地絵図で、田畑の地番、本田・本畑・道（豊前道）・川・水路・他村飛地・海・砂浜・野・筋境・本田荒・本畑荒・河原・寺社が色分けされ描かれている。

『別府村』

太く描かれた赤い線が「豊前道」。この道沿いに別府村の家々が建てられた。海岸部は砂浜となっている。

『浜脇村』

豊前道は浜脇の町から赤松（あかまつ）・銭瓶峠（ぜにがめとうげ）方面へと通じている。右下には住吉（すみよし）神社が描かれている。

『朝見村』

朝見川に流れ込む乙原川（おとばるがわ）や鮎返川（あゆかえりがわ）が描かれている。画面の下の方には朝見神社も描かれている。

『立石村』

画面中央を縦断するのが朝見川。画面は観海寺付近の様子。

（2） 古文書

日名子文書：「船舶資料」

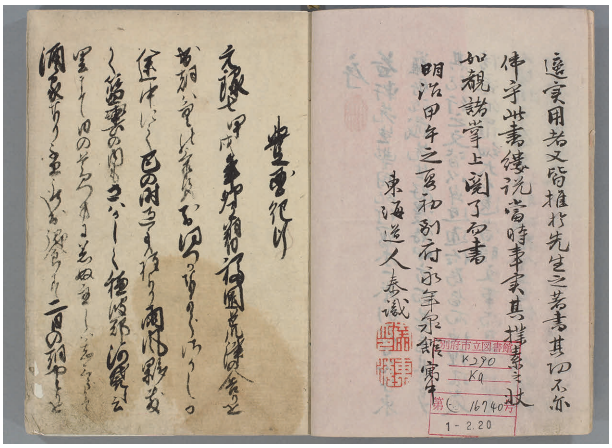
日名子文書は、「府内屋」の屋号で旅館業を営んだ日名子家に伝わった資料群である。

日名子家は、明治時代に入ると旅館業のかたわら蒸気船問屋を営んでいたことから船舶関係の資料も多く存在する。

この資料は、蒸気船「金比羅丸」の乗船券で、乗船の際の注意点などが記載されている。金比羅丸は、大阪～別府間を運行して等級によって３段階の運賃設定があった（河野 1985）。

日名子文書：貝原益軒「豊国紀行」写

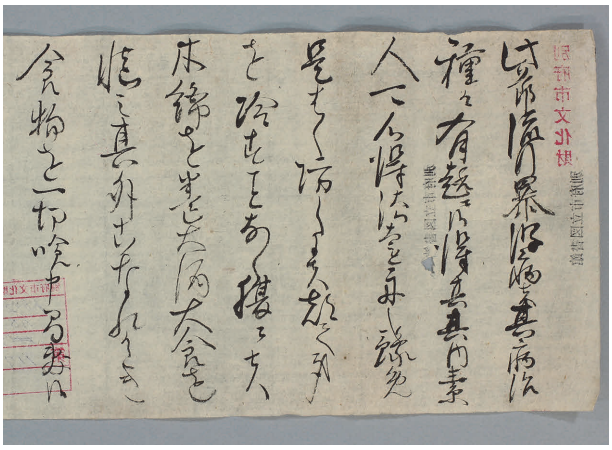
豊国紀行は、福岡藩の学者である貝原益軒が、藩祖黒田如水の戦跡である石垣原合戦の取材に別府を訪れた際に記された紀行文。本書は写本であるが、日名子家所蔵本は、吉田東伍が『大日本地名辞書』を編纂する際に参考にしたという（福田 1939）。



堀文書「暴瀉病覚」

堀文書は、江戸時代から明治・大正と別府の行政ならびに経済界と関係の深かった堀家に伝わった資料群。

この資料は、安政５年（1858）に国内で暴瀉病（コレラ）が蔓延した時に幕府が発した予防法の写で、体を冷やさず暴飲暴食を慎むことなどの対処法が記されている。



（3） 歴史資料

別府村公印

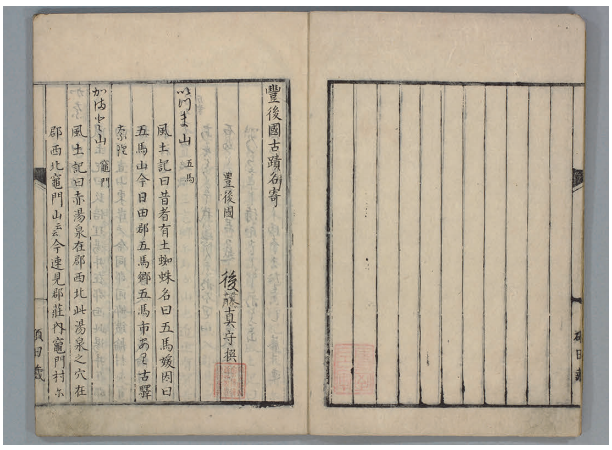
明治時代に別府村で使用されていた公印。「速見郡別府村役場」「別府村役場之割印」「大分縣速見郡別府村々長高倉駒太印」などが残されている。

高倉駒太は、別府村の村長として明治 26 年（1893）に町制を施行し、最初の別府町長も努めた。

「碩田蔵」版木

後藤碩田は、江戸時代後期から明治時代にかけて活躍した学者で、田能村竹田に学び「豊後国古蹟名寄」や「大化帖」などをまとめた。

この版木は、後藤が原稿用紙を刷る際に使用されたもので、中央下部に「碩田蔵」と陽刻されている。右下の写真は、「碩田蔵」と刻印のある原稿用紙に記された『豊後国古蹟名寄』。



別府札

明治時代のはじめ、政府が発行した太政官札は高額な紙幣であったため、これを補うため各地で少額の紙幣が多く作られた。別府生産会所は、明治２年（1869）５月に「別府生産会所銭券」を発行した。

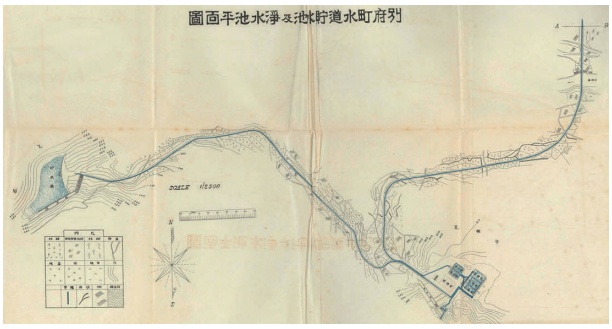
「別府札」と呼ばれたこの紙幣の下部には「四郡通用」と書かれており、速見郡・大分郡・玖珠郡・直入郡で使用された。

（4） 行政関係資料

別府町水道事務所 1917『別府町水道要誌』

明治 39 年（1906）に計画書の作成にとりかかり、大正 6 年（1917）に竣工した第一期計画の詳細が記された資料。

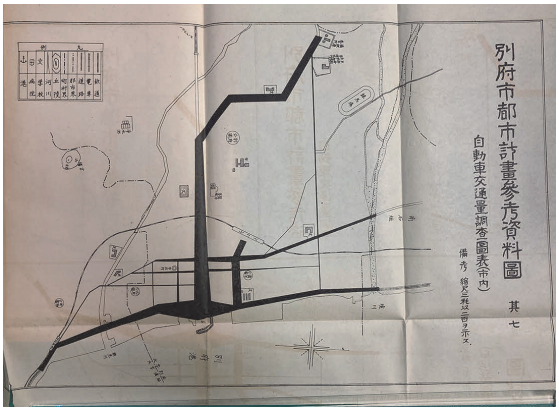
別府市における水道事業は、市域の拡大とともに改修・増設が行われるが、別府市立図書館には、各時代の改修記録書が保管されている。



都市計画大分地方委員会 1931『別府都市計画参考資料交通並びニ運輸調査』

都市計画の参考にするため、自動車台数や船舶の利用状況などの大正から昭和初期までの統計資料。

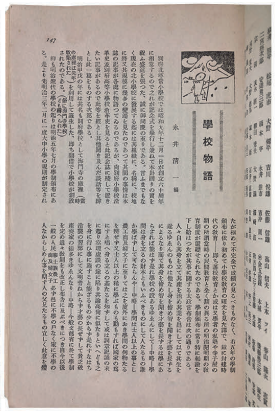
右図は、昭和 6 年（1931）時点における自動車交通量調査の図で、別府港周辺及び流川通りの交通量が多いことがわかる。



（5） 教育関係資料

別府市北小学校同窓会 1935『創立六十周年記念誌』

明治 7 年（1874）12 月に開校した別府北小学校（現：別府市立別府中央小学校）が、昭和 9 年（1934）に 60 周年を迎えた際に作成された記念誌。市立図書館には市内に所在する学校の周年記念誌が所蔵されており、各学校の沿革を知ることができる。



別府中学校校友会 1934『鶴嶺 - 創刊号 -』

昭和 9 年（1934）に開校した別府中学校の校報創刊号。冒頭に初代別府中学校長の兼子鎮雄（かねこしずお）の発刊の辞がある。

各号には教務日誌が記されており、その期間における学校の動向を知ることができる資料となっている。

別府市小学校社会科主任会編纂 1953
『別府市社会科見学の手引第一輯』

別府市の小学校社会科教員の組織である社会科主任会が作成した社会科見学の手引書である。

戦後まもない時期ではあるが、児童の実地見学実現のための教員の努力がうかがえる資料となっており、官公庁や企業の沿革や問い合わせ先が記載されている。

（6） 郷土史研究関係資料

福田紫城 1948『速見郡村誌稿』

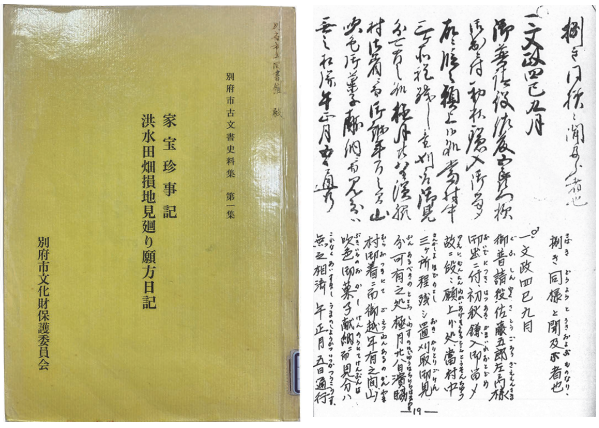
福田紫城（ふくだしじょう）は、昭和初期に活躍した郷土史家。別府市立図書館には、福田が執筆・編纂した資料が多く収蔵されている。

『速見郡村誌稿（はやみぐんそんしこう）』は、明治９年（1876）に、当時の県知事の依頼により加藤賢成がまとめた『大分県郡村誌』の中から速見郡を抜粋し謄写校註した資料。明治初期における別府の様子がわかる資料である。

別府市文化財保護委員会 1971『別府市古文書史料集　第１集』

『別府市古文書史料集』は、別府市教育委員会・別府市文化財保護委員会がまとめた、別府市に関連する江戸時代から明治時代までの古文書を収録した資料。

「家宝珍事記（かほうちんじき）」「洪水田畑損地見廻り願方日記（こうずいでんぱたそんちみまわねがいかたにっき）」は、江戸時代の石垣地区における災害の発生や被害の様子が、克明に記されている。



（7） 古地図

『豊後有名温泉案内地図』（明治 39 年（1906））

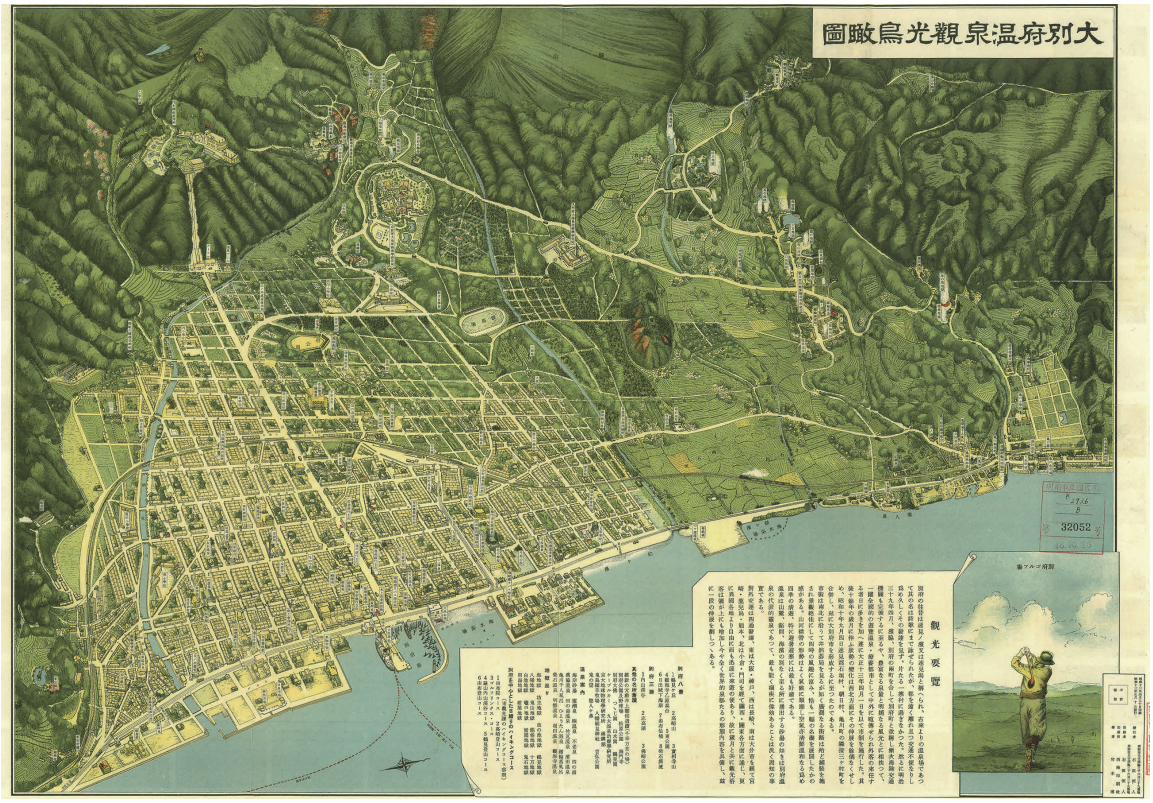
明治 39 年（1906）に発行された鳥瞰図。海岸通りには電車が描かれるが、鉄道は開通していない。

『別府町全図』（明治末～大正初期頃）

明治末に計画された街区と旧道が混在する地図。未着工の街区は点線で表記されている。

『別府市鳥瞰図』（大正 14 年（1925））
　大正時代の終わり頃になると街区整備も進行し、別府港には桟橋ができるなど街並みが整備されつつある。

『大別府温泉観光鳥瞰図』（昭和 13 年（1938））
　昭和 10 年（1935）に朝日村・亀川町・石垣村と合併し、市域が拡大した別府市を描いた鳥瞰図。様々な観光施設が整備されるなど、国際的な温泉観光都市として成長した別府市の様子が描かれている。



（8） 絵葉書

絵葉書「豊後別府温泉場全景」

明治末期から大正にかけて撮影されたものと思われる別府町の全景である。

この時期、高層のコンクリート造りの陸屋根（ろくやね）も無く、なだらかな地形にそって甍（いらか）の家並（やなみ）が統一的な景観を醸（かも）しだしている。

明治 32 年（1899）6 月、朝見病院の鳥潟恒吉（とりかたつねきち）院長の招聘で別府を訪れたドイツのエルウィン・フォン・ベルツ博士（東京大学教授）が、この光景を眺（なが）めて「東洋のナポリ」と絶賛したと伝えられている。

絵葉書「別府温泉場の海の門戸大阪商船桟橋」

別府港波止場（はとば）が明治 4 年（1871） 5 月 30 日竣工。以来、ここが正に湯の町別府の玄関口として栄えた。大阪商船株式会社（おおさかしょうせんかぶしきがいしゃ）は、明治 26 年（1893）12 月 31 日に設立された。大正 9 年（1920）5 月 12 日大阪商船別府支店を新築。建物は、事務所と待合室の 2 階建てであった。昭和 42 年（1967） 7 月 15 日に別府国際観光港の完成により、港が移転した事で建物は解体された。

絵葉書「別府名所　松原公園ト松栄館ノ盛観」

創業は、大正７年（1918）９月７日、館主は玉井小鍛冶だった。大分県初の常設映画館は豊玉館、大正２(1913)12 月と言われている。上映だけのものは、明治 40 年（1907）10 月創業の芝居小屋松涛館で移動上映された。

その後、常設映画館として世界館・大正８年（1919）12 月、大成館・昭和４年（1929）12 月 31 日創業と続く。松栄館は、大正 13 年（1924）１月 20 日火災で焼失し、大正 14 年（1925）１月１日新築し再開した。当時の松原公園界隈は、西の浅草と呼ばれた。

絵葉書「(別府温泉）泉都の商店街流川通り」

大正末期から昭和始めの湯の町別府のメインストリートは流川通りである。昭和３年（1928）に、油屋熊八によって日本で最初の少女車掌（バスガイド）が始まった。美文調の説明で「流川通り」を「此処は名高い流川、情のあつい湯の町を、真直ぐに通る大通り、旅館商店軒並び、夜は不夜城でございます」

当時としては、大通りで自慢していることが伺がわれる。

絵葉書「展望東洋一を誇る遊園地　鶴見園」

鶴見園は、広島県呉市出身で、呉市長や貴族院議員を務めた松本勝太郎が、鶴見園一帯の土地約 41,000 坪を大正５年（1916）に買収し、温泉、プール、遊戯場、レストラン、４階建の展望台などを備え、大正８年（1919）８月４日に開園した。

大正 12 年(1923)小劇場、大正 14 年(1925)大劇場が完成した。九州の宝塚、鶴見園少女歌劇団は、大正 15 年（1926）２月 14 日にオープンとなった。全盛時代は、昭和２年（1927）から同 18 年（1943）まで続いた。太平洋戦争の煽りを受けて昭和 18 年（1943）に閉園した。

絵葉書「別府ホテル」

創業は、明治 44 年（1911）9 月 11 日。洋風 2 階建て、洋室 14 室、和室 7 室、そのほか遊戯室、応接室、玉突き場、酒場、さらに大小浴場が 4 ヶ所であった。増加する外国人観光客に対応するために建てられたもので、別府で最初の洋式ホテルであった。後に、満洲鉄道別府療養所に衣替えした。

絵葉書「日本航空株式会社別府飛行場」

大正 12 年（1923）4 月に川西機械製作所（社長川西清兵衛）が日本航空株式会社を設立。同年 7 月から大阪～別府間の定期貨物輸送を開始。大正 13 年（1924）7 月から定期旅客輸送と遊覧飛行を始めた。当時大阪～別府の鉄道運賃 6 円に対し、同区間の航空運賃は 80 円であった。また、遊覧飛行は 5 円。

写真の J-TATV 機

・機種：ロ号水上偵察機（旅客機に改造）

・製作国：国産機

・型式：横廠式水上機

・出力：200 馬力

別府飛行場には格納庫や吊り揚げデリックを備えていた。

絵葉書「（別府温泉名勝）世界無比の大仏」

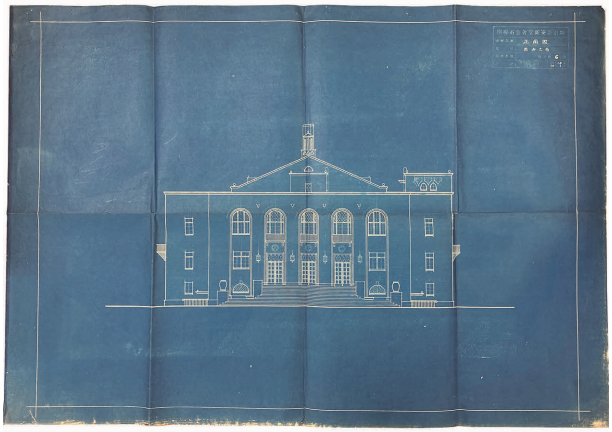
昭和 3 年（1928）3 月 28 日落慶した。奈良や鎌倉の大仏より大きく高さ 24m。施主の岡本栄三郎（法名・栄信）が全国行脚して集めた無縁仏の人骨の灰をコンクリートに混ぜた鉄筋コンクリート造りである。作者は、福岡県の彫刻家の山崎朝雲（昭和 27 年（1952）文化功労者）の高弟の仏師入江為義。老朽化が進み、平成元年（1989）4 月 25 日閉眼し、同年 8 月 30 日に解体された。

（9） 別府市公会堂建設関係資料

公会堂建築設計図

別府市公会堂は、東京中央郵便局などの日本近代建築の名作を残した吉田鉄郎（よしだてつろう）により設計され、昭和３年（1928）に竣工。別府市立図書館には、古写真をはじめ建物の設計図の青焼き図面、吉田の手による照明設計図が残されている。

写真は、別府市公会堂の設計図の青焼き図。表題欄下部の決裁欄には、設計者の吉田らの決裁印を確認することができる。

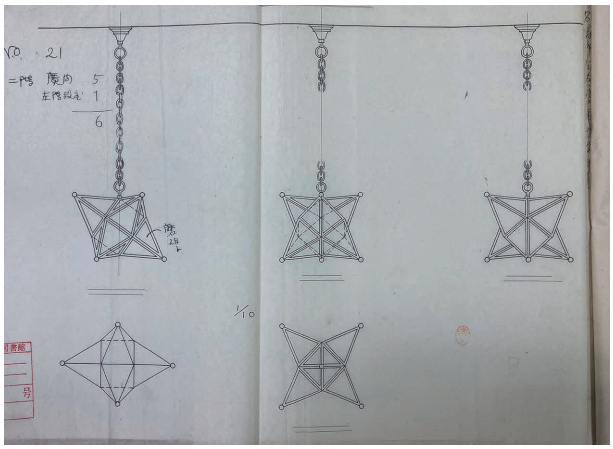


公会堂照明設計図

室内などの照明の設計図。照明も吉田哲郎により設計されている。

写真は２階広間（現在の３階）の星形のシャンデリアで、広間部分に５個、南側の階段部分に１個設置された。

正面階段の入口内部や３階第２会議室には、建設当初から使われている照明が残されている。

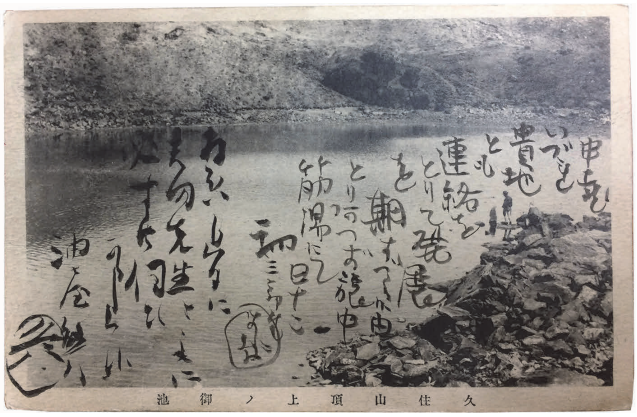


(10) 油屋熊八関係資料

油屋熊八直筆絵葉書

「別府観光の先覚者」とも称される油屋熊八（あぶらやくまはち）は、明治時代末から昭和初期にかけて別府温泉で旅館業を営むかたわら別府の観光宣伝に勤めた。

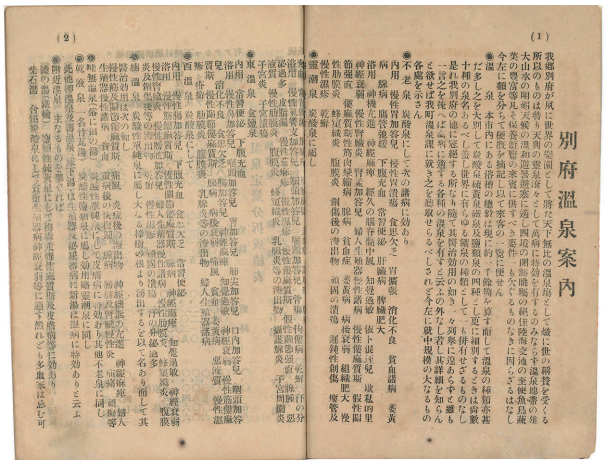
別府市立図書館には、鳥瞰図画家吉田初三郎（よしだはつさぶろう）と連名で、久住の工藤元平に宛てた絵葉書や油屋が吉田に依頼したパンフレットが所蔵されている。



（11） 別府温泉近代発展史資料

別府市温泉課 1911『別府温泉案内』

別府町温泉課が刊行した別府温泉案内。町内の各温泉施設の効能や遊覧地、土産物などを紹介している。遊覧地としては、別府公園や浜脇公園などとともに、松原通を「東都の浅草公園浪花の千日前と等しく常に慇懃」と紹介している。

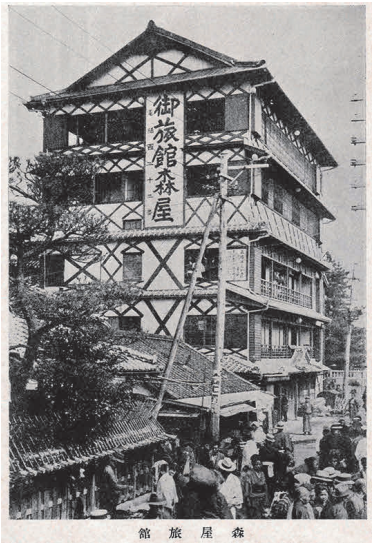

別府温泉案内

安部義人 1924『市制記念別府温泉画報』

創業は、明治 33 年（1900）頃、もともとは３階建てであったが、大正元年（1912）頃に４階・５階を継ぎ足した。

５階の屋根には「モリヤ」と白い文字が大きく書かれていて、汽車や船で別府に着けば「モリヤ」が目にとまり宣伝効果は抜群であった。

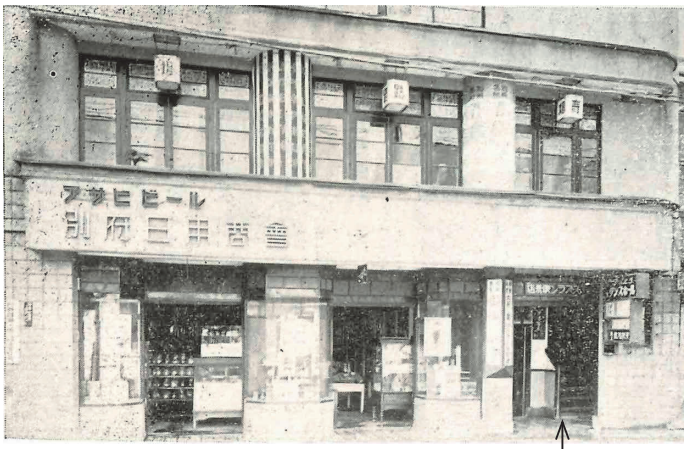
建物の耐震性を高めるためブレース（筋違（すじかい））で補強しているが、これが剥き出しとなっているのが特徴的な建築意匠となっている。



森屋旅館

安部登 1937『大別府案内』

創業は、大正 13 年（1924） ６月。店主、武田三代治（たけだみよじ）。武田三代治は、別府町長第４代武田綾太郎（たけだあやたろう）の長男で、慶應大学在学中に東京銀座の喫茶ライオンに通っていた。これを参考に、大学卒業と同時に、父が経営する日用商会の西側の１階に九州で最初の喫茶店スズランをオープンした。客は、大阪商船の待合の客や文化人の憩いの場として賑わった。



喫茶スズラン入口

1939『勝地漫画別府温泉』

昭和初期の別府の街の様子を漫画と文章で紹介している。紹介している場所は、流川通りのほかに、血の池地獄や別府港の埠頭での釣りの様子まで描かれている。

1940『別府温泉案内』

別府市内の名所が描かれたリング綴じスケッチブックに、バスや人物などが飛び出す仕掛け絵本のとなっている。

亀の井バスによる地獄めぐりを題材として、流川通りのほか血の 池地獄などの地獄の様子が描かれている。

1950 年代
『別府温泉地帯の最優理想的住宅地』

昭和 20 年代の荘園や観海寺などの新興住宅地を紹介する絵葉書。

右写真は七ツ石温泉の外観と浴場の様子で、駅周辺などの市街地が題材になることが多い絵葉書のなかで、郊外の住宅地周辺を題材にした珍しい絵葉書集である。

松本登 1952『鉄輪温泉』

戦後まもない昭和 27 年（1952）に発刊された鉄輪温泉を紹介する冊子。

戦前に鉄輪地獄があった場所につくられた貸間での噴気を利用した炊事の様子や貸間の湯治客の様子が記されており興味深い。

おわりに――これからの 100 年――

大正 11 年（1922）6 月に別府町図書館として誕生して 100 年を迎えた当館の歴史は、別府市の歴史そのものである。それは別府市の市政、経済、文化、観光の発展の証言者であり、市勢発展を支えてきた施設の一つでもある。

これまでの 100 年が市民に愛され、支えられた図書館である一方で、当館の図書資料により、人々が学び成長することをサポートし、未来をつくる役割も担ってきた。

市民待望の新しい図書館は着々と整備計画が進められている。その新図書館は「ひとりひとりの暮らしと創造のよりどころへ」を基本理念に掲げ、『教育』・『健康・福祉』・『産業』・『アート』・『まちづくり』に貢献する地域の創造拠点をめざしている。

まさにそれは市民が憩い、安らぎ、暮らしを楽しむサードプレイスとして機能する公共空間にほかならない。

別府市立図書館は、これからの 100 年も市民とともに歩み、ひとり一人に向き合いながら地域をつくり、未来をつくる図書館であり続けたいと念じている。

新図書館機能のダイアグラム（別府市教育委員会 2020）

参考文献

岡野定治『別府旅館能力調査表』大正９年（1920）
別府宿屋組合『豊後温泉地旅館名簿』大正 12 年（1923）
別府市教育会『別府市誌』昭和８年（1933）
温泉タイムス社『大別府人物史』昭和 10 年（1935）
安部登『大別府案内』昭和 12 年（1937）
福田紫城「初版校訂に就て」『大分県紀行文集』昭和 14 年（1939）
『図書館国庫補助起債一件』昭和 27 年（1952）
別府市立別府図書館『要覧』昭和 31 年（1956）
大分合同新聞社『目で見る大分百年』昭和 44 年（1969）
志多摩一夫『別府文化史年鑑』昭和 48 年（1973）
小森郁雄『航空開拓秘話』昭和 49 年（1974）
『日名子文書目録』昭和 55 年（1980）
別府市社会教育課『別府の社会教育』昭和 56 年（1981）
『市報べっぷ５月号 №1264』昭和 59 年（1984）
大阪商船『創業百年史』昭和 60 年（1985）
河野昭夫「第三節　便利になった交通」『別府市誌』昭和 60 年（1985）
安部巌『別府温泉湯治場大辞典』昭和 62 年（1987）
別府観光産業経営研究会『別府近代建築史・地霊（ゲニウス・ロキ）』平成５年（1993）
小野弘『別府宿屋組合百周年記念誌』平成 23 年（2011）
松田法子『絵はがきの別府』平成 24 年（2012）
別府史談会『別府の風土と人のあゆみ』平成 29 年（2017）
外山健一『べっぷの文化財 №.49 －別府築港－』平成 31 年（2019）
別府市教育委員会『別府市新図書館等整備基本計画』令和２年（2020）
別府史談会『別府史談　第 33 号』令和２年（2020）
別府市立図書館各種展示目録

協力者

兼子隆正 氏・境哲也 氏

べっぷの文化財　No.52
－別府市立図書館100年－

令和４年３月

発　行　　別府市教育委員会
編　集　　別府市教育委員会
　　別府市文化財保護審議会
印　刷　　大野印刷株式会社